

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.9 その 7

【号外】インド・ウッタラーカンドからの報告

長濱和代（日本経済大学経営学部教員）

2022 年 8 月 9 日から、3 年ぶりにインド入りしています。今回の目的はヒマラヤ山麓の村落で 10 年ぶりの世帯調査を行うことです。面談調査と参与観察により、どのように森林利用と管理が変容したかを把握しようとしています。今回は『「黄昏の太宰府」便り』を変更して、インド・ウッタラーカンドからの報告をお届けします。

1. インド入りを決意する

2020 年からコロナ禍となり、インド行きをこの 2 年余り、躊躇してきました。特に 2020 年後半からインドでは爆発的にコロナ感染者が増加して、渡航禁止が出たほどに入国が困難な状況が続いていました。2022 年春になると渡航が緩和されたのですが、それでも今までのようにパスポートとビザだけでなく、ワクチン接種証明書と PCR 検査陰性証明書の提出によりインドへの渡航が可能となりました。日本では、今年（2022 年）夏にコロナ感染者数増加の第 7 波が到来したため、私は国や大学、或いは周囲から私の渡航を制限する圧力が現れるのではないかと不安と恐れを募らせていたのですが、結局、圧力はかからず、インドへの渡航が実現できることになりました。

このような状況の中で、インド渡航については、次の目的と強い思い入れがありました。第 1 に、修士論文を書くために初めて実施した調査が今夏にちょうど 10 年目を迎えること、第 2 には採択された科研費（基盤研究 C）が 2 年目に入りデータ収集を計画してきたこと、第 3 の理由を追加するなら、ともに院生時代を過ごしたインド人の友人がウッタラーカンドの私立大学で教員となり、講義の依頼を受けたことでした。それとは別に東京の私大で教員をしている南アジア研究者の友人から調査チーム組織編成の依頼があり、彼女が 10 年ぶりのインド行きを希望されていたことも、私のインドへの渡航を後押ししました。

家族は、いつものように私の渡航を諫める者は誰もおらず、むしろ夫は賛成の様子でしたが、実家の母は「日本ではコロナが広がっているのに、何故インドへ行くのか」と私のことを心配していました。私が日本で拡散している種のコロナウイルスをインドへ運ぶことにより現地でご迷惑をかけるのではないかという懸念だけでなく、インドではコロナウイルスはインフルエンザと同様の扱いをされているので、その渦中へ飛び込んでいく無謀な私への半ば諦めにも近い思いもあったようでしたが、インドへ送り出してくれました。

2. ニューデリー入りする

2019 年秋の渡航の際に私は 5 年のビザを取得していたことので、準備は比較的簡単に進みました。フライト前日に、地域の医療機関での PCR 検査でコロナ陰性証明書を取得することにより、日本から問題なく出国しました。ニューデリーのインディラガンジー空港での入国審査では顔見知りの審査官もいたので、空港では友人の入国審査のサポートもでき、3 年のブランクがあったとはいえ、インドへ毎年のように通ってきた経験が活かされたことを実感しました。

ニューデリーでは最初の通訳の家族や、道で迷った時に親切にもらった家族など、複数のホストファミリーがいます。とりわけ親しく、単身の時はいつも宿泊させてもらっている Verma 家からは、長男であるムケシとおつれあいのルビーが私たちを空港で迎えていただき、再会を喜びました。晩はムケシの長男のアーカッシュ（10 歳）がホテルに来てくれたので、彼の成長の様子から 3 年の年月の長さを実感しました。



写真 1 午前 6 時前のニューデリー駅

今回のツアーで同行した友人は同性で、かつ気持ちもわかり合うことができ、調査とはいえいつもにはない女子会的な楽しい雰囲気があります。デリーに留まり調査を進める彼女と、翌日から北部へ移動する私とは別行動になるため、翌日以降は 1 人で探検にいくような冒険的側面を楽しむことになります。そんな価値観の共有と、今後の互いの研究調査の成功を祈念しつつ 10 日後にまたデリーで落ち合う計画の確認をして、デリーでの初日の晩を過ごしました。

3. ウッタラーカンド行きの列車に乗る

ムケシに予約してもらった鉄道のチケットを手に翌朝、午前 4 時半にタクシーでホテルを出発、5 時半前にはニューデリー駅に到着しました（写真 1）。タクシーを下りるとすぐに赤い服を着たポーターが近寄ってきて、荷物を持とうとするのですが、高額な金額を要求されるのは遠慮したいので、その手を振り払い、「I don't need your Help.」と構内に入るまでに、親切に声をかけてくれた複数のポーターに同じ言葉を伝えました。

ウッタラーカンド行きの特急電車は、いつも入り口手前のホームの 16~18 番線から発車します。それでも発着ホームについては誰かに確認がしたくて、近くにいたインド人に尋ねると、彼は適当なことは答えず（自ら声をかけてくるインド人には注意が必要です）、スマホを取り出してすぐにオンラインサイトで検索を始めたのです。そして電車の番号「12071」をそのサイトにインプットをして、「18 番で大丈夫」と親切に教えてくれました。適当に答えるインド人も少なくないのですが、ネット検索から解を導く行動は、スマホの利用が生活に浸透していることを多に実感しました。

駅構内でのマスク着用者は 2 割程度で、複数のいすを使って横になっている人も少なくありません。「お金がほしい」「食べ物ほしい」と身振り手振りで訴えにくる女性たちが数名いたのですが、マスクを着用したまま PC に向かって仕事をしている私が反応しないので、諦めて去って行きました。構内ではこん棒を手にした男性らが常にパトロールをしていて、その後、誰かにしつこく言い寄られることもなく、ホームで 1 時間余りを過ごしました。

発車時刻の 30 分ほど前にホームに入ってきた電車は、いつも乗車している青い車両（写真 2）で、今年はさらに年季が入っているように見えました。どの車両に乗るのかを確認するためにインド鉄道（国鉄）の制服を着た職員にスマホの中に入ったチケットを見せると、彼は私のスマホを取り上げて（コロナ禍なのに、人の携帯を簡単に触らないでほしい！と思いました）別の若手職員に見せて、チケットに書かれた車両番号と座席を確認した後、親切にも私を座席まで案内してくれました。スーツケースを座席の上の荷物置き場へ上げてくれ、着席しようとしたところで、なんだか雰囲気がおかしい！と思った時に、チップを要求されたのです。鉄道の職員でも侮れません。チップは 10 ルピーでは足りなくて、50 ルピーで成立。インドでは国鉄職員もチップを必要とするようです。

私の座席の横には、既にノーマスクの 30 代の男性が着席していて、どこに行くのか何の目的で渡航するのか等あれこれ聞かれました。コロナ禍なので最初は会話をためらったのですが、6 時間余りの道中、いろいろな情報を伺うことになりました。



写真 2 ウッタラーカンド行きの特急電車

特にインドの鉄道の予約では、『MAKEMYTRIP.COM』のサイトから予約して支払いまでできるので便利とのことでした。鉄道も人に頼らずに自分でアレンジするのが良さそうです。

隣の彼は、到着駅のディラドーンでは出迎えなどあるのか聞いてくれたので、「自分でタクシーかオート（原動機付バイク）を拾うので少し不安」と答えると、前の座席の女性が私と同じ終着駅で下りることを確認した後「自

分は手前のハリドワールで下車するので、駅で降りたら彼女のタクシーを見つけてあげてほしい」と頼んでくれました。私も彼のように「世話を焼く」のが好きな性格ですが、見知らぬ私をお世話するその彼はさらに上を行くと、感心しました。こうしたインド人は少なくなく、私がインドを愛する要素の一つでもあります。ちなみに今回の会話はインド人同士ではヒンディー語で、自分を交えての会話は英語で、英語が通じるインド人が少なくないのはありがたいです。

車内では良くエアコンが効いていて、乗車直後は寒い程でしたが、駅に停車する度に冷房が止まって次第に気温が上がり、最終地点では蒸すほどの暑いほどでした。車内でのエアコンが止まると空気の移動がなくなるため、1 人でもコロナ感染者がいたら、多くの乗客が感染するだろうと思われました。

4. 州都のディラードンに入る

ディラードン市では、いつもは NGO のゲストハウスに宿泊してきましたが、今回は頼りにしてきたリーダーのアドハッシュ・コーシャル氏が前月に逝去されたので予約が難しくなり、さらにコロナ禍での衛生上の不安もあって、州森林局に近いビジネスホテルを Booking.com を利用して予約をしました。列車で同席した女性が、オートの運転手と金銭交渉をしてくれたのでホテルまでは 200 ルピー以上は支払う必要はないと言われていたのですが、予約したホテルに着くと、運転手と再び金銭交渉をすることになり、5 割増しの 300 ルピーを支払いました。こうした交渉はインドでは良くあることで、自分が元気な状態の時はこのやり取りは楽しいですが、忙しい時などは煩わしく感じることもあります。今回もそう感じたのは、年齢を経て自分の活力が低下しているせいなのかもしれません。

それでもホテルに到着すると外の通りの音がうるさくてガーデン側の部屋に変更、さらに 2 泊を 1 泊にする変更は難しいと渋るフロントと交渉して、ここでは値段を下げてもらうことに成功しました。

ウッタラーカンド州の森林局を訪問すると、マスクをしている人は誰もおらず、コロナ前と同様にあちこちの部署を訪れ、気軽に役人たちと話をすることができました。州森林統計を扱う部局では、「アルモウで入手したお菓子があから食べていきなさい」と進められ、森林パンチャーヤトを扱う部局では、「お茶はいかがですか。」とグリーンレモンティをご馳走になりました。州森林局から出されている『州森林統計』は毎年発行されてきたのですが 4 年前から更新がなく、この数年の間、ずっと気にかけてきたので尋ねたところ、「コロナの影響もあり刊行が遅

れていたが数ヶ月後には発行予定」であること、『森林パンチャーヤト規則』2005 年版から 2012 年の追加事項が付与されて新版(写真 3)が刊行されていること等がわかり、その冊子を頂くことができました。英語版の刊行についても待たれるところです。さらに『森林パンチャーヤト規則』2022 年版が準備されているとのことで、そこには「Biodiversity Management Committees(BMCs)」やグラム・パンチャーヤトとの協働についての記載などが盛り込ま

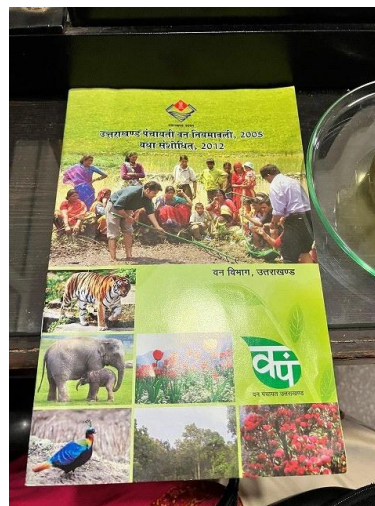


写真 3 ウッタラーカンド州森林局にて
森林パンチャーヤト担当の皆さんたちと(左)
最新の『森林パンチャーヤト規則』(右)

れるとの新情報まで聞き取ることができました。

10 年前にこの州森林局で森林パンチャーヤトを担当していた K 氏にも、その翌日にお会いしました。彼は森林局でより高いポストである DFO に昇進しておられ、私が博士となり、森林パンチャーヤトの研究により学位が取

得できたことを多いに喜んでくださりました。さらに彼の後任の PCCF や統計資料の英語訳の依頼ができる森林官を紹介いただきました。人を介してより知り合いが増え、ネットワークの構築により情報が集まり、次の調査に望むことができます。特にインドでは（カースト制度に代表されるように）組織がトップダウン式の構造になっているので、上級の役人との関係性の構築が、情報収集において有利に働く場合があります。

この当時、ちょうど私は修士の院生としてインドでの調査を始めていて、州森林局長に面会するために毎日（少なくとも 3 日間）森林局へ通っていました。この時に会った K 氏から、「自分がたいへん尊敬しているリーダーがいて、その村には 170 余りの村落を統括する森林パンチャーヤト長の R 氏がいる。彼は自分の地域で森林パンチャーヤトを組織して、ヒマラヤの森を守っている。彼の村に滞在して森林管理の自治組織パンチャーヤトの作り方やそのしくみを学んではどうか。」ということで、テーリーガルワール郡にある D 村を紹介いただき、世帯調査を始めたことが研究を続ける契機となりました。



写真 4 テーリーガルワール郡の村落

5. テーリーガルワールの山村に入る

今回の調査は、この D 村での滞在と 10 年ぶりの世帯調査を目的としています。事前に R 氏の親類でもある B 女史（結婚のために 9 月まで D 村に帰省中）に通訳を依頼していたので、ここでもまた K 氏自らが B 女史と連絡を取り合ってください、D 村への乗り合いジープを手配。コロナ禍ということで、2 人分の座席を確保していただきました。K 氏とは 2016 年に英語論文を共著で執筆したこともあり(Nagahama et al. 2016a)、今なお、私の現地での研究を支援してくださっています。

この時期はモンスーンの時期で雨が降りやすく、時には激しい雨と雷雨になることもあります。避暑地でもあるムッスーリまで一気にジープで上がると、暑さは消えて涼しさが感じられました。谷を越える時は、前日の雨により川が水で溢れ、ジープでないと渡れないほどで、道が崩れていて危険な場所もありましたが、無事に 5 時間の道のりを過ごして D 村に到着しました。B 女史とは 5 年ぶりの、R 氏とその家族らとは 3 年ぶりの再会に喜びました。

6. 聞き取り調査をはじめ

現在は D 村に滞在して、聞き取り調査と参与観察を始めています。10 年ぶりの世帯調査では、多くの世帯で高齢化が進み、家畜を手放す世帯が増えています。当時と異なるのは、すべての世帯でプロパンガスがあり、老人から子どもまで携帯電話（または iPhone やタブレットなど）持っていて、IT 化が進んだことです。それでも薪は使われているのが興味深いです。また R 氏からは、「Our Land is polluted!」という話があり、家畜の糞を発酵させて作ってきた堆肥から化学肥料に変わり、市場で購入した種子を利用するようになり、作物が育たなくなっています。10 年前よりも世帯数が増えている一方で、都市で仕事をしたり留学したり人口も増加しています。10 年前の調査結果の一部と研究の動機についての詳細は今年 8 月に刊行した著作にて（2022 環境探究学研究会）、この調査結果はまた論文にてまとめる予定ですので、ご期待ください。

【参考文献】

- Kazuyo Nagahama, Kaoru Saito, Misa Masuda, Masahiko Ota, Hem Gairola, Subodh Kumar Kala, Randeep Rakwal (2016) Forest Commons Use in India: A Case Study of Van Panchayat in the Himalayas Reveals People's Perception and Characteristics of Management Committee. Environment and Ecology Research 4(3) 128-139.
- 環境探究学研究会（2022）『学校教育の未来を切り拓く 探究学習のすべて—PC×R サイクルによる指導原理と評価法』合同出版